

# AAINews

## 誰のための・・・

先の1月23日に行われた建設省吉野川可動堰建設計画の是非を問う徳島市の住民投票において、徳島市民は「建設NO!」という意味を表した。吉野川は暴れ川として昔から恐れられてきたが、この可動堰建設計画は固定堰である第十堰が老朽化しており、水量が増えると水害を及ぼすと思われるために計画され、150年に一度の洪水に備えるための治水工事である。堰の事業費は950億円、道路橋併設の場合は1030億円という。治水は重要であることは疑いの余地はないが、最近の大型公共土木工事を見ていると、今回も土木工事をする側の土木の論理において行われる治水工事ではないかと思えてくる。確かにひとたび災害が起きた時の責任を誰が取るのか、という議論もあるだろうが、過半数を超える住民の反対票にもかかわらず、今まで通り建設を推し進めようとする建設大臣はじめ徳島県知事。洪水を防ぐことだけでなく、流域住民の日々の営みにおける人と川との好ましい治水の関係という考えが欠落しているように思える。でも確かに、都市近郊の経済・産業的にも有利な自治体と違って、地方自治体においては建設土木公共工事により雇用を確保し、地方経済を活性化するという意図はあるのだろう。

川は、水を介して上流から下流までつながっており、その水は海にそそぐまで飲料水や農工業水に利用されるなど流域の人々の生活に密接に結びついている。川は、いかに早く効率よく海に排水するための単なる水路では決してないはずである。第十堰の問題は、吉野川全体の流域の問題といっても過言ではなからう。川は生きものである。河岸が削られたり、土砂が運ばれて堆積したり、川が曲がったりするのはごく自然なことである。それをコンクリートで囲ってまっすぐにし、堰を設けて単なる水路にして制御しようとする治水も私たちの生活を守るためといえ万事解決するのだろうか。自然環境に及ぼす影響からも、一部では蛇籠(じゃかご)や粗朶沈床(そだちんしょう)といった自然材料を用いた工法が見直されているようである。

第十堰付近における住民には、家や田畑を洪水から守ってくれ、という切実な要望はあるだろうし、上中下流域それぞれにおいて様々なニーズがあるだろう。例えば、憩いの場であったり、農業や漁業を営む環境を確保するなどといったニーズもあるだろう。それよりも建設省、建設族議員に益があり、ゼネコンが潤うというニーズなのだろうか。そのための可動堰なのだろうか。「今の日本の行政は、民意を反映していない。」と、住民は思っていたから今回の建設反対票9割という結果になったのではないのだろうか。今回の投票は徳島市民だけではあったが、このまま何事もなかったように建設が進められるとしたら、住民の意志というものはどうなるのか。日本全国津々浦々、ダム建設をはじめとして、交通量の少ない片田舎の広域道路しかり、どんな山奥に行ってもコンクリート構造物にお目にかかれぬ所はない日本である。果たしてこれは住民のニーズからくるものなのだろうか。

昨今は、途上国の援助において住民参加型というのがキーワードであるが、その援助する側の国内で、このような住民参加の行政がなされていないとは。少し前の例を紐解いてみれば突如、成田の農村地帯に空港建設が極秘に決定され、空港建設反対派闘争が起こって以来、日本の行政のあり方は基本的にはあまり変わっていないのであろう。誰のための吉野川なのか。吉野川流域に生活する人々のための川であるならば、行政と住民とが互いに積極的に対話し、さまざまな知恵を出し合い、考え、よりよい方法を探していくことが真の行政・地域づくりであり、それにより血税が生きてくると思うのだけれど。(2月：小島冬樹)

PS. その後、建設省と吉野川流域住民との対話が何回か行われています。

